

730-1

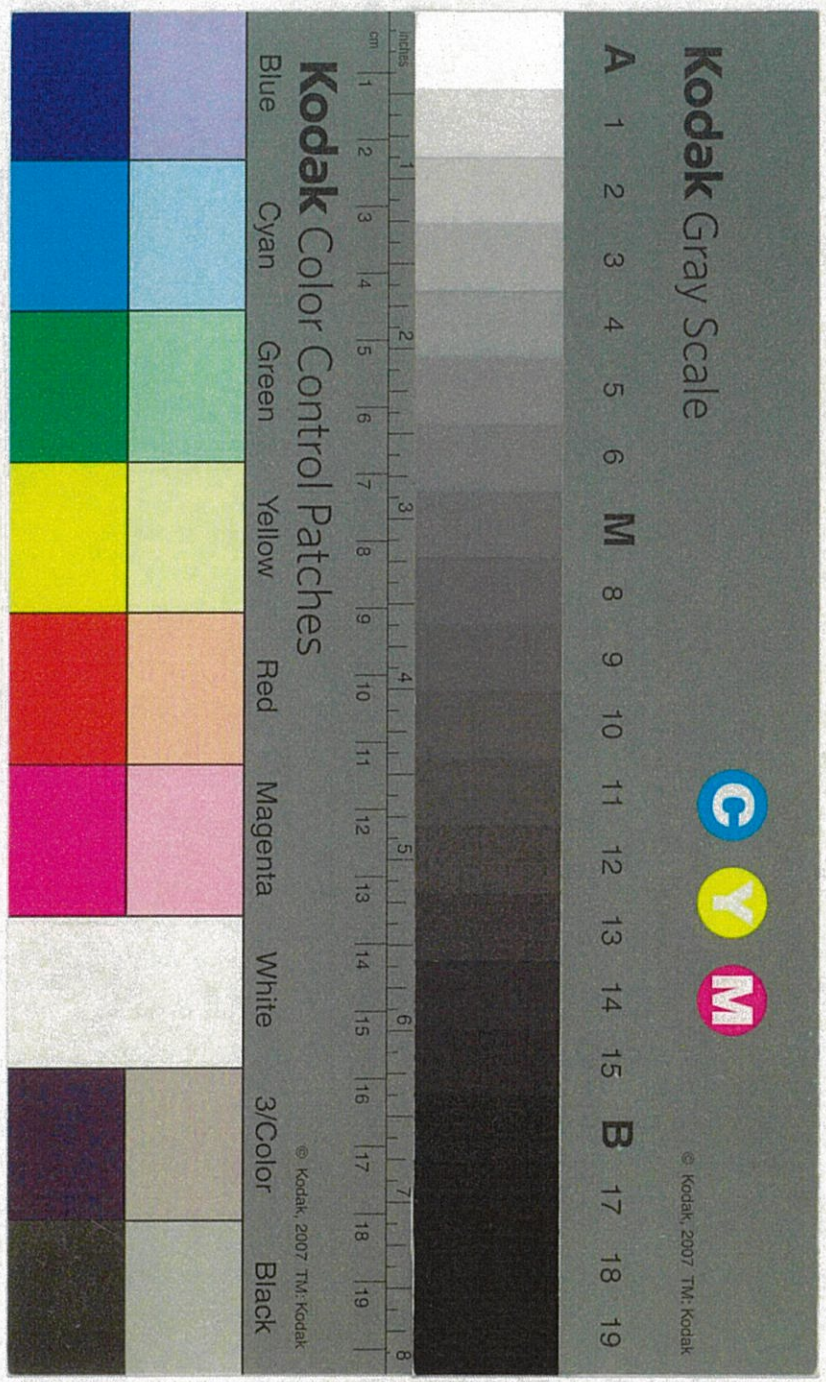
2491.4
N
2
第29
218

日本生化学會會報

第一卷 第一號

1925年 10月

日本生化学會



日本生化学会

目次

日本生化学会々報發刊之辭	1
日本生化学会設立始末	1
日本生化学会第一回總會豫報	2
地方部會消息	2
會員名簿	10
研究室便り	15



日本生化学会會報發刊之辭

學問の研究に志す者が互に連絡を圖ることは研究上に多大の便宜であるのは云ふ迄もないことで、出来上つた仕事を持出して他の人々から自由な意見を求めたり、他人の仕上げた仕事の梗概を早く知つたり、年に一度位は出来る丈多く集つて意見の交換を行ふさいふ目的で日本生化学会が生れたのである。其目的の内互に會つて話合ふ時以外の連絡をつけるのが本會報であるから中々其任務は重大である。

本會報の主體は勿論各地方部會で行はれた演説の梗概を其時交換された意見の大略から成り立つべきものであるから本會誌の目的が達成せらるゝや否やは全く全會員諸君協力の程度によつて決定せられることなる。尙生化学發展上會員諸君の抱懐せらるゝ意見は顯感されることなく本誌上に發表せられて他の會員諸

君の意見を交換せらるゝを得ば益々本誌を有意義のものたらしめることが出来ると思はれる。編輯擔任者は各地方部會例会記事や會員の寄稿の到着したものを編纂するの外努めて會員の動靜、内外生化学界に於ける重要な記事杯を速かに本誌上に報告することになつて居るが是亦大に全會員諸君の協力に俟たざるを得ないことゝ信ずる。

更に若し會員諸君が内外専門雜誌閱讀の際有益なりと思はるゝ論文の内容を抄録して寄稿され又海外にて見聞せられたる印象を報道せられたらば本誌は益々斯學研究者を益することが多いことは疑ふ餘地がない。

行け生化学会會報。爾は全會員の協力に由つて立ち全會員の努力によつて歩む。幸あれ生化学会會報。

日本生化学会設立始末

柿内三郎

編輯擔任者から日本生化学会設立の始末を書いて呉れこの依頼を受けたので奉公の第一歩を觀念して簡單に茲に其經過を略記することゝした。

似寄つた方面の研究をする人達が各地から年に一度位宛集つて専門學上の意見の交換をする様な機會があれば良いとの希望は以前から殆んき總ての人の胸裡に懷かれて居つたものに見えて度々多くの人々から日本生化学会設立の必要を聽聞したのであつたが其必要を認める人は多くは研究に教授に多忙なばかりな爲めか實行は遂ひ年一年を遷延されて來たことゝ思ふ。そこで成人々からの希望に基いて幸ひ私が外字生化学雜誌で斯學の諸學者と密接な交渉があつたので不取敢先づ此等の諸家に相談することにした。尤も日本生化学会は外字生化学雜誌とは何等の關係のないことは此處に特筆して置きたい。外字生化学雜誌は日本の業績を

國際的に發表する機關とし兼ねて諸外國人士の爲にも紙面を提供して居るものであるし、今度の日本生化学会は研究者相互の意見交換と研究上連絡を圓滑にする爲めの結合である。偶々日本生化学会組織に對し有力な諸家が外字生化学雜誌の協力者として携はつて居られた結果此等の諸家に相談を致したものであつた。

其結果は此處に贅する迄もなく勿論諸家殆んき全部の賛成を得、間もなく會則に對する諸家の意見が集まつた。之は明かに此學會設立が斯學専門諸家の常に念をされて居つたことを語るものである。四月四日多數意見によつて會則を制定し、又發起人連名を以て趣意書を四方に飛ばし同好の士を勧誘することにして茲に本會が成立した次第である。

此會設立の經過を記すと同時に是非追記したいのは本會の構成に關したることである。即其特長の第一點は

本會の主體は聯合した地方部會にあることである。本會が其目的とする各研究者相互意見の交換及び研究の連絡に對しては二種の方法による必要がある。即ち一方には集會によつて會員相互意見の交換を行ひ、他方には印刷物によつて廣く意見の交換其他の消息を傳へるのが夫である。其内後者即印刷物による意見交換は任意一處に集め編輯して各地に分配することによつて左程困難なしに行はれ得るが、前者即ち集會には地理的關係から絶えず各地より多數の會員が或る地に參加集會する事は出来ぬから常時には各地方地方に於て之を行ひ年に一回位全國を通じた會合を行ふより外に途はない。從て此目的を遂行するに必要で且つ有效な方法は地方部會の設立に其完全な發達にあることは勿論である。斯くすれば互に參加し合ひ得る距離内の會員が必要に應じて會合を催はし研究の結果を報告し意見の交換を行ふことが出来る。此會合で行はれた報告や意見の交換の概要は會報によつて全會員に傳へられれば遠隔地の會員も紙上で意見の交換も

行はれ得る様になる。年一回の總會に各部會から特別の意見交換の演題を提けて會員が參加したらば殊に面白い。

本會特長の第二點は會員相互の Fraternity である。角張つた行政的應酬は廢して學問上には昨日初めて試験管を持つた者でも五十年來研究に従事したのもでも等しく研學的に同胞である云ふ見地から互に交はりたい。先輩の意には勿論従ふべきであるし、新進の言には又傾聴しなければ研究の目的は達成されるものではない。此様な親しみのある集會で地方部會が行はれ、又同じ態度で各部會が互に相呼應し相會したならば學藝發展上甚だ喜ぶべき結果を見ることは明かである。故に地方部會の會員は全部對等で、又各地方部會は全く對等の關係にある必要がある。既に舉行された關東、京都の各地方部會の状況の見聞による地方部會例會は甚だ親しみのある會合であつた。來るべき第一回總會も亦懐かしい集會といふ感を留めることを信じて疑はない。

日本生化學會第一回總會

豫て本會總會は日本學術協會を時を同じうして開催する心算であつた處同會は來十月三十日より三日間舉行のこになつたので本會總會は來十月三十一日より三日間舉行を決定した。總會の第一日には交見演説、第二及び第三日には報告演説、第一日夕には全會員の

懇親會を催す豫定である。會場は東京帝國大學に於て適當の場所を選ぶべく目下交渉中である。

總會に提出すべき演題は既に大阪、京都その他の部會から多數に送られて來た。演題順序等決定の上は對外で會員に通知することになつてゐる。

地方部會消息

大阪部會

代表委員、松岡全二
委員、後藤眞語、福富徳次郎、近野政次。
地方部會事務所、大阪醫科大學醫化學教室

岡山部會

代表委員、清水多榮(岡山醫大)

委員、柿沼吳作(岡山醫大)
辻線(倉敷町倉敷中央病院)
板野新夫(大原農事試験場)
暉峻義等(大原勞動科學研究所)
尚部會は岡山を倉敷と交互に之を行ふ由。

名古屋部會

代表委員、朝川順
委員、小川巖、水谷通治、丸井壯軌
地方部會事務所、愛知醫科大學醫化學教室

京都部會

委員の氏名は下の如くである。
代表委員、小松茂
委員、前田鼎、後藤基幸、鈴木文助、大杉繁、近藤金助。

關東部會協議會

大正十四年四月十六日(木)午後六時から東京本郷燕樂軒に於て關東部會に關する協議會が開かれた。出席者は下記九氏である。

柿内三郎(發起人、帝大醫化學)、照内豊(發起人、慶大醫化學)、佐々木隆興(發起人、佐々木研究所)、菊池貢(海軍軍醫學校)、小泉親彦(陸軍軍醫學校)、永山武美(發起人、慈惠大學醫化學)、杉本好一(佐伯矩氏代理、榮養研究所)、藤井暢三(帝大醫化學)、有山登(帝大醫化學)。

會食後各出席者の極めて自由卒直なる質議應答あつて議事は賑かにかつ快く進行した。當日協議決定した事項は次の如くである。

1) 委員。
常務委員、本日の出席者たる上記九氏及び既に委員たるの承諾を得た島村虎猪(發起人、帝大農學部)、赤松茂(發起人、千葉醫大)、河本禎助(傳染病研究所)の三氏の他柴田桂太(帝大理學部)、左右田徳郎(帝大理學部)、服部健三(帝大藥學科)及山本亮(理化學研究所)の五氏に委員たらんことを懇懇すること。

附記、以上五氏並に厚木勝基(帝大、工學部)及び山川洵(水産講習所)の二氏は委員たることを快諾せられた。
即委員は合計十八名である。
代表委員、年齢順に一年交代に之を勤めること。
即第一回代表委員として照内氏推さる。

2) 例會。
期日、隔月(偶數の月)一回、第三土曜午後二時から二三時間の豫定で開始すること。
但開會三十分前に委員會を開くこと。
第一回例會は六月二十日に開催する。
會場、可及的各委員所屬研究所に於て順次之を行ふこと。
第一回例會は慶應醫學部にて行ふ。
會費、地方部會費として年一圓を蒐集すること。
演題、各委員は可及的その所屬研究所の業績を本會に於て最初に發表すること。
演題の適不適に關し嚴選すること。
演説の長短詳練は演者の隨意であつて豫報的のものも差支へない。
演者は内容抄録を呈出すること。而して此抄録は例會開會數日前之を會員に配付すること。

3) 關東部會事務
凡ての事務は假に帝大醫化學教室に於て柿内、藤井、有山の三氏が之を取り扱ふこと。

尚協議の終つた後、日本生化學會總會に就き下の如き下相談があつた。

第一回總會。
期日、今年十月日本學術協會第一回總會を時を同じうして東京に於て之を開催する。
日割。
第一日、晝間交見演説、夜間會員懇親會
第二日、報告演説
第三日、報告演説
會員外の者も雖も委員の紹介があれば演説を行ふことが出来る。傍聴は隨意。

札幌部會

大黒薫氏から下の如き通信があつた。
日本生化學會の件につきましては農學部の三宅教授及び田所教授と相談いたしまして只今各方面を勧誘中であります。小兒科の永井教授や鐵道病院の梅澤博士

や小生教室の末吉君なごの同意を得更に工學部の化學並に豫科の化學の方々もよく打合はせ不日會員の名簿も出来、地方部會も成立するこゝ存じます。

その他金澤醫科大學及び長崎醫科大學より地方部會に關し追つて報告する旨通信があつた。

第一回日本生化學會關東部會例會記事

既報の如く第一回關東部會例會は六月二十日(土)午後二時から四谷信濃町なる慶應醫學部講堂に於て開かれた、折柄の梅雨空の下に會する者八十名を超え豫期に勝るの盛會であつた。

開會に先ち一時半から委員會を開き柿内、照内、佐々木、菊地、永山、山本、杉本、藤井、有山の諸氏出席次の如き申し合せをした。

會場、今後可成的親しみさ曖昧さのある室を用ふるこゝ、及び全體の氣分を軟ける爲め茶菓を出すこゝ、その接待費の一部は部會から補助し不足の分は會場委員の負擔するこゝ。

司會者、會場を提供する委員之に當るこゝ。

演説抄録、例會豫報用として百字以内のもの、會報掲載用として千字以内のものをおそくも例會開催二週間前(第一土曜)に呈出するこゝ。

定刻に至るや湧が如き拍手の裡に照内代表委員の開會之辭、柿内委員の本會成立經過に關する報告終つて會員の演説に移つた。

照内代表委員の開會之辭

先般日本生化學會が成立致しまして今日はその最初の例會を此慶應大學醫學部に於て開きます。

先刻委員會で申し合はせましたが、さうか演説及び質疑討論は角張らずに和氣霽々の裡に之を行ひ度く此點特に御願ひ致しておきます。又質問、討論の際には明確に御名前を云はるゝ様願ひます。今日は私が司會者になります。

柿内委員の報告

日本生化學會の現状に就いて一寸簡単に申し上げます。日本生化學會は昨年十二月二十四日から愈々相

談を進めまして各帝大及び單科大學の生化學を専門にする人々及び理、農、工各學部の生化學を専門にする人々を含む發起人が出来上りました。その名前はABC順で申します。

赤松茂(千葉醫大)、朝川順(愛知醫大)、後藤基幸(京都醫大)、後藤元之助(九大醫學部)、井上嘉郎治(東北大學醫學部)、岩野俊治(奉天醫大)、加藤七三(熊本醫大)、川北元三(新潟醫大)、小松茂(京大理學部)、古武彌四郎(大阪醫大)、前田鼎(京大醫學部)、三宅康次(北大農學部)、永山武美(慈恵醫大)、大黒薫(北大醫學部)、奥田讓(九大農學部)、佐々木隆興(佐々木研究所)、島村虎猪(東大農學部)、清水多榮(岡山醫大)、須藤憲三(金澤醫大)、照内豊(慶應醫學部)、富田雅次(長崎醫大)、吉村清尙(鹿児島高等農林學校)。

以上の二十二氏及び私であります。

日本生化學會の事業としては先づ各地方に於て地方部會を設け夫々例會を開いて學術報告や意見の交換を行ひ又年に一度は全國の會員が集つて總會を開くこゝに致しました。此總會では一方に於ては普通の學會に見る如く簡潔な報告演説をするこゝ同時に他方に於ては問題になり相な演題を各部會から持ち寄つて意見を交換する即交見演説を行ふこゝにいたしました。

尙此學會の事業を一層完全に近づけるため隔月會報を發行いたします。これには各地方の例會の記事とその折の討論を残らず掲載いたします。會報は七、八の兩月は發行致しませんから年に五回出るわけです。

さて關東部會は東京、千葉及び横濱地方を包含して構成するこゝになり四月十四日に關東部會創立の委員會を開き

佐々木隆興、照内豊、永山武美、島村虎猪、赤松茂、柴田柱太(東大理學部)、厚木勝基(東大工學部)、服部健三(東大醫學部)、左右田徳郎(東大理學部)、河本禎助(傳研)、佐伯矩(榮養研究所)、小泉親彦(陸軍)、菊地寅(海軍)、山本亮(理化學研究所)、山川尚

(水産講習所)、柿内三郎、藤井暢三(東大醫學部)、有山登(同)

以上十八名の人々を部會委員として挙げました。

日本生化學會の會員の總数は今日のこゝろ342名になりました。尤も毎日入會者がありますからごんごん増加します。その内關東部會に屬するものが160名であります。

既設の地方部會及びその代表委員は今日迄の所、

關東部會、照内豊氏

名古屋部會、朝川順氏

京都部會、小松茂氏

大阪部會、松岡全二氏

岡山部會、清水多榮氏

尙北海道其他各處では相談中このこゝであります。

第一回の總會は各地方代表委員の意見を綜合した結果來十月末東京に於て開かるゝ豫定であります。確定の時日は他の學會と交渉の上決定致します。

先程照内さんからなる可く角ばらない様に御注文がありましたが出来だけ丸く圓滑にやつて頂き度く思ひます。就ては此例會でもこれから東京生化學者會の會で實行して居ました様に會員同志の名を擧げる時に「何々君」と云はず「何々さん」と呼んで頂き度く思ひます。東京生化學者會の會は三年半十八回開きましたが、會場では「君」と呼ばず一切「さん」呼びにいたしました。自由な和氣を以て會合を進めて實に愉快な會でした。此度此關東部會が出来ると同じ目的の會合が二つあるのは如何に存じ先月の會の例會で會員に同會を止める相談をいたしましたこゝろ其時大部分の人々は會を閉づるこゝに不賛成でありました。しかし此關東部會が角張らなく自由に討論が出来る會になれば會と同じ結果は樂に得らるゝこゝでありますから其期待を以て會を止めるこゝになつたのであります。でありますから會員諸君には何卒のんびりした氣分で自由に御談論を願ひます。會場も今後可成的話し合ひ易い様な處にし度いと思つて居ります。別室にお菓子とお茶が用意してありますから休憩

時間にお菓子を頬ばりながら充分に談話の交換を願ひます。

先程も申しました様に討論する時には「さん」呼びにして頂き度い。例へば今日演説される甲斐さんのこゝを照内さんは平常甲斐君と呼んで居られるでせうが此所では甲斐さんと呼んで頂き度い。御承認の方は手をあけて下さい。(一同舉手)

これから照内さんを司會者として演説を初めます(拍手)

1) o-, m- 及 p-Tolyl-L-Alanin の合成

佐々木研究所 佐々木隆興、橋本徳二

要旨、未だ天然物から發見せられない Amino 酸を人工的に合成し其性質を識つてから天然物中にその存在を追跡するのも亦一の研究方法である。演者等は此意味に於て Tolyllalanin の合成を試みた。

曩に Para 體及び meta 體は合成せられた。しかし Ortho 體に就ては未だ報告がない。演者等は Ortho Meta, Para 體を何れも佐々木氏法によつて容易に合成した。即ち1分子量の無水 Glycerin, 2.5 分子量の Tolylaldehyd, 4 分子量の無水醋酸普達及4分子量の無水醋酸をよく混合し120—130° に於て大約6時間加熱すれば茲に縮合物を得。收得量は Para 體 77%, Meta 體 76%, Ortho 體 48% である。此縮合物に10倍量の沃化水素酸(D 1.7)及少量の赤燐を加へ8時間加熱後減壓で過剰の沃化水素を去り苛性加里液を以て中和すれば Tolyllalanin を得。此反應に於ては Ortho, Meta, Para 體何れも殆んど計算量の收得がある。又 Para 縮合物を氷醋酸に溶解し亞鉛粉と共に熱すれば Tolyllalanin の無水物を得。演者等は Meta 及 Ortho 體に就いては未だ無水物を得ないが Para 體同様還元體を作り得るであらう。

p-Tolyllalanin に細菌を作用せしむるさ芳香物質を生ずる。之は目下實驗中である。

討論質疑

長谷川さん、過剰の沃化水素酸を減壓蒸餾する時如何

なる装置をお使ひになりましたか。

橋本さん 普通用ひられて居る方法に従ひ枝付 Kolben を二個組合はせ水流ボンプで引きました。

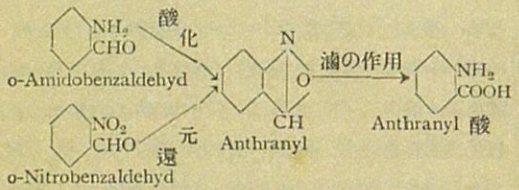
長谷川さん その時の壓力はどの位まで下ける必要がありますか。

佐々木さん 水流ボンプで 15—20 mm 位まで下げますがそれで充分です。要するに減壓の程度は重大な意味はありません。

2) o-Amidobenzaldehyd, o-Nitrobenzaldehyd 及び Anthranyl の動物体内に於ける變移

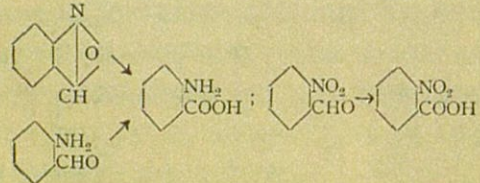
佐々木研究所 細田 孟

要旨 o-Amidobenzaldehyd は Friedländer 氏 Chinolin 合成の型式により Kynuren 酸に移行すべき理論的可能性があるから之を家兎に與へて見たが Kynuren 酸の成生を認め得なかつた。更に下の有機化學的事實を考慮して上述の 3 物質を家兎に經口的及非經口的に與へて生化學的觀察をした。



Hamberger 氏及其の門下の研究によれば Anthranyl から Anthranyl 酸に移行するのは分子内轉化によるものと考えべきである。

演者の得たる實驗知見は次の如くである。



3) Furfuramid 及 Furfurin の動物体内に於ける變移

佐々木研究所 細田 孟

要旨 Anthranyl が Anthranyl 酸に移行するが如き分子内轉化を検する目的で Furfuramid を家兎に經口的に與へその尿中に Pyromykur 酸, 焦性粘液酸及 Furfurakryl 酸を證明した。Furfurin は毒性があるので充分なる量を動物に與へ得ないから尿中にその移行體を看做すべきものを認め得なかつた。

4) 松毛蟲毒に就て

千葉醫科大學皮膚科教室 和田 平 武

要旨 90—95% 酒精に貯へた松毛蟲體を水で浸出し之を減壓濃縮した後純酒精中に滴下し生じたる沈澱を材料とした。此沈澱の 5% 水溶液は人體皮膚に對し著明なる蕁麻疹様皮膚炎を惹起し南京鼠に對しては最小致死量 0.4 cc である。

此溶液は酸性であるが之を苛性曹達で中和した後も毒性に變化はない。本溶液の毒性は加熱により影響されない。又燐酸酸性とし減壓加熱するも蒸餾し得ない。毒素は Äther に不溶性で膠様水酸化鐵, 白陶土, 獸炭等によつて吸着されない。又 Colloidum 囊に對して透析する。

これ等の點を顧慮し化學的分離を試み演者は白色無晶形物質を得た。その水溶液は黄色透明で Lakmus 紙に對して中性, Fehling, Millon 共に陰性, Ninhydrin 反應及 Folin 氏 Phenol 反應は陽性である。

和田さんの演説後學生實習室に於て茶話會が催され歡談 15 分の後演説は續行せられた。

5) 急性及慢性 Morphin 中毒動物体内に於ける Morphin の運命に就て

慶應大學醫學部醫化學教室 照内豊, 甲斐惣太郎

要旨 急性及慢性 Morphin 中毒動物体内に於ける Morphin の運命に關しては今尚決定的事實なく急性の場合に於てはその一部は速に動物体内に於て破壊せられ他の大部分は糞便と共に排泄せられるといふ説と腎臟より體外に排泄せられるといふ説及急性の場合にも

大部分の Morphin は體内に於て破壊せられるといふ説がある。慢性の場合に於ては Morphin は次第に破壊せられるといふ説及動物體の Morphin 破壊力は漸時亢進するものでないといふ説等がある。

私達は急性及慢性中毒動物体内に於ける Morphin の運命を追究するに先ち Morphin 定量法の案出を企て種種の方法を比較研究したる後 Morphin は凝固性蛋白質の存在する場合には微量の Morphin はその凝固塊の内に包容吸着せられ溶媒による浸出を著しく妨害することを知つた。故に先づ Papain 酵素を用ひて凝固性蛋白質を消化し非凝固性となし Gottlieb-Stepuhn 氏法を改良した私達の方法を用ひて定量した結果好成績を得たので此方法を用ひて實驗を開始した。

先づ一定量の Morphin を家兎の皮下に注射し體內に於けるその分佈の状態を追究したところ急性の場合に於ては Morphin は全然破壊せられるものではなく注射せる全量を分泌液, 排泄液及體組織内に證明した。就中筋肉は注射せる Morphin の大部分を包容吸着し之を分泌液及排泄液中に次第に輸送するものなることを發見した。更に慢性の場合に反し動物體の Morphin 破壊力の非常なる亢進を認めた。慢性中毒動物の筋肉は急性中毒動物の筋肉に比し遙かに多量の Morphin を包容吸着する事を知つた。

6) Paramecium の生化學的研究

東大醫化學教室 宇賀田爲吉

要旨 單細胞生物が單獨分裂によつて蕃殖する時漸次に衰へてゆく其蕃殖能力が接合によつて恢復するのは周知の事實である。演者は此接合の際に行はれる複雑な機序に一つの生化學的説明を與へやうとして實驗的に數ヶ月に亙つて接合の機會を奪ひながら飼育した Paramecium に就いて其生活現象が諸種の化學的物質によつて如何いふ影響を蒙るかを研究した。

先づ高等動物の栄養に必須と看做されてゐる數種の amino 酸 (tryptophane, lysine, histidine, tyrosine, cystine) が斯ういふ状態にある Paramecium の分裂速度を促進

する作用を持つてゐるか如何かを調べた所が此等の amino 酸は個々單獨に其作用を持つてゐないばかりでなく其濃度を種々に變へたり或は之を數種類混合して用ひて見ても少しも効果を認めることは出来なかつた。更に卵白を部分的に水解して得た物質を用ひて見たが Paramecium は其蕃殖能力を恢復するに至らなかつた。反之核酸曹達は或る一定の濃度に於て Paramecium の分裂速度や其他の生活現象に著しい効果を及ぼすのを見た。そこで演者は其時核酸曹達が培養液の中に混在してゐる細菌の發育を促して間接に Paramecium に影響するのではないか如何かを實驗的に調査して其は直接に Paramecium の生活力に良好の作用を及ぼすものであることを見出した。

核酸曹達の斯やうな著しい効果は細胞核成分と核の分裂との間に密接な關係が無ければならないこと或は接合の時に細胞核成分の交換が行はれることを思へば決して異常の事實ではないであらう。著者は目下核酸の構成成分が單細胞生物の蕃殖能力に及ぼす影響を調査中である。

討論質疑

和田さん 核酸曹達液は濃淡何れが有効ですか。宇賀田さん 0.025% 及 0.005% のを用ひましたが後者の方がより長時間有効でした。

7) Cystin の製法に就て

北星研究所生化學室 (主任照内部長)

岡部 連

要旨 從來 Cystin の製法は毛髮の鹽酸加水分解液を苛性曹達或は炭酸曹達で中和し又は醋達曹達で水素 Ion 濃度を低くし Cystin を析出せしめて居たが收量は少なかつた。演者は鹽酸加水分解液を中和するに Ammoniak を以てし同時に Cystin の析出に好適なる水素 Ion 濃度を研究し pH 4.8 を得た。かくの如くして殆んど定量的に Cystin を析出せしむることが出来た。

討論質疑

長谷川さん Cystin 析出の際何時間位冷却しますか。

著作権に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができません。場合によっては、国立国会図書館

西部さん、長時間冷す必要はありません、冷え切ればそれで充分です。

次で照内さんの閉会の辭あり盛會裡に6時散會した。

日本生化学會京都部會相談會

大正十四年六月十五日京都帝國大學醫學部教授前田鼎氏、農學部教授大杉繁氏、同鈴木文助氏、同近藤金助氏、理學部教授小松茂氏及び京都府立醫科大學教授後藤基幸氏等集會談合の上日本生化学會の目的に従ひ京都部會を設立すること並に左の事項を決議せり。

- 1) 京都市並に附近在住の同志相集りて京都部會を組織すること。
- 2) 部會は毎學期講演會を一回開催し(都合にて二-三回)親睦を謀り智識交換を行ふ。
- 3) 部會に世話人二人を定め講演その他萬端の事務を處理す。但世話人は順番を以て交代す。
- 4) 講演を分ちて二こなし一般講義用のものは研究報告もす
- 5) 會費は別に蒐集せず

京都部會よりは本年度小松茂氏を選定し常務委員とす。但し京都部會第一回世話人は便宜上小松茂氏とし第一回集會を六月二十三日に開催することにせり(小松氏通信)

京都部會第一回講演會

大正十四年六月二十三日午後七時より京都帝國大學樂友會館に於て開催す。之に先ち部會世話人は京都帝國大學農學部、同理學部、同醫學部、京都府立醫科大學、高等蠶絲學校、藥學專門學校、農學校等に日本生化学會京都部會講演會開催の旨を通知せり。

開會に際し當番世話人は日本生化学會の設立に至るまでの經過、會の目的、京都部會の設置及び毎學期講演會を催すこと等を述べて挨拶せり。

次で下記の講演ありたり。

- 1) Casein chloride の解離に就て

京都帝國大學農學部教授 農學士 近藤金助

要旨 蛋白化學に關して現今重要とされて居る問題の一つは Real solution の研究の結果提出された化學上の方則を蛋白質の溶液に對して如何なる程度に又如何なる範圍に應用し得るかといふことである、換言せば Colloidal solution である蛋白質溶液内に於て其の Disperse Phase を形成して居る蛋白質の行爲を純正化學上の法則にて律し得るゝや否や、茲に律し得るにせば Real solution と Colloidal solution である所の蛋白質溶液との働きが如何なる程度に又如何なる範圍に一致するかといふことである。そして最近に於ける斯學發達の傾向から見ると蛋白質の溶液内に於ける働きを純正化學に解釋するのが適當であること考へる學者が次第に増加して居るに信ずる。此の主旨のものに演者は先づ蛋白質と無機酸又は Alkali との結合に關して從來發表せられた重要な論文に就て批評を試み其の趣旨によつて之を三つに分類した。

更に Casein の鹽酸溶液中の水素 Ion 及び鹽素 Ion の活度を測定するために次の式を實驗的に提出した。

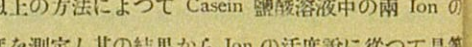
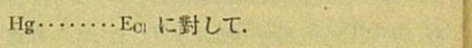
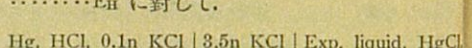
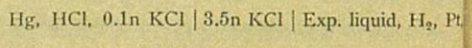
$$p_{aH} = \frac{E_H - 0.3348}{0.0577 + 0.000(t - 18^\circ)} \dots \dots \dots (1)$$

$$p_{aCl} = \frac{0.0674 - E_{Cl}}{0.0577} \dots \dots \dots \text{at } 18^\circ \dots (2)$$

但し $p_{aH} = -\log a_H$ であつて a_H は水素 Ion の活度である。

又 $p_{aCl} = -\log a_{Cl}$ であつて a_{Cl} は鹽素 Ion の活度である。

又 E_H 及び E_{Cl} は夫々次の Element の Potential である。



以上の方法によつて Casein 鹽酸溶液中の兩 Ion の活度を測定し其の結果から Ion の活度説に従つて是等の Ion の濃度を算出して鹽酸溶液に Casein を溶解した前後に於ける兩 Ion の濃度を比較考慮した。其の結果次の事實を發見したのである。(1) Casein は鹽酸溶

液の中に於て其の Igm. につき鹽素 Ion の 2.10-4 gram-equivalents と結合する。(2) Casein chloride の解離度は約 0.72 である。(3) Casein 1gm' に對して結合する鹽素 Ion の Gram-equivalents の數並びに Casein chloride の解離度は供用した溶液の水素 Ion の活度に無關係である。終

- 2) 動物體內に於ける左旋性乳酸の生成に就て

同醫學部教授 醫學博士 前田鼎

要旨 (原稿未着)、左旋性乳酸が動物體內に於て生成することに關し歴史的考察を述べ次に醫化學教授室に於ける荒木總長及び前田教授指導の下になされた幾多研究の結果を綜合し詳細に述べたり。

次で各々意見交換ありて十時散會せり

當日の來會者は下の七十氏なり。

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 前田 鼎 | 志方 益三 | 近藤 金助 |
| 大杉 繁 | 丸山 勉 | 森澤 清 |
| 山名 率雄 | 田中 長次 | 淡野豊太郎 |
| 沖中 忠一 | 野澤龍三郎 | 谷村愛之助 |
| 前田 啓 | 北野伊八郎 | 明石 修三 |
| 河原 重信 | 後藤 基幸 | 金 柄 達 |
| 黒田 啓次 | 小 溪 潔 | 山本 秀雄 |
| 廣田 直憲 | 小池豊太郎 | 星野 貞次 |
| 森島 辰夫 | 菱川 侃一 | 山口 昌三 |
| 行友 威彦 | 増本 文吉 | 小 松 茂 |
| 土屋 格 | 林 常益 | 佐野 吉雄 |
| 今井 通 | 石橋左五郎 | 内野 仙治 |
| 松本 秋介 | 和田咲三郎 | 平井敏太郎 |
| 木村 英雄 | 益 井 蒼 | 塩谷 惣次 |
| 星各 陽一 | 武田 誠 | 河合 勉 |
| 吉松 軍司 | 樺島 祝 | 小泉 清明 |
| 伊東 祐晴 | 佐野十九一 | 正路倫之助 |
| 木村 廉 | 勝 義 孝 | 加 藤 了 |
| 廣多 孝藏 | 奥 正 己 | 佐藤重次郎 |
| 土岐 正雄 | 岡 勇 夫 | 甲 田 安 |
| 井上 吉之 | 武居 好雄 | 河野 通利 |
| 井上 周吉 | 齋藤 重斌 | 庄山 清一 |

- 小龜 正雄 藤井 勝也 辻 嘉門
安野 吉郎

長崎部會相談會

日本生化学會長崎部會に關して去る九月二十八日幹部のみの集會が行はれた。當部會は藥學專門部主事川上氏、同教授深川氏、田中政彦氏、高尾克巳氏及び大學職員平井金三郎氏その他内科の角尾、影浦、永末諸君の後援を得て當教室員を中正とし向後發展致し度く思ふ、十月末の學會には萬障繰合せ出席するつもりである(富田氏通信)

大日本醫學會本會との交渉

今春來大日本醫學會は本會に對して再三再四同會の一分會として加入方を勧誘して來た。

しかし本會は常に醫學の方面のみならず同時に理、農、工等廣大なる範圍に互り複雑なる組織の許に成立して居りかつ各地方委員の賛成を経た上でなければ何事も決議し得ないのであるから唯今の所遺憾ながら加入の承諾は出來ない状態にある。

何れ來る總會に於て全委員に圍りその全部の賛成を得たならば喜んで加入する旨返事をして置いた。

會員名簿

A

縣 芳次郎 (京都醫大)
 赤 松 茂 (千葉醫大)
 赤 尾 晃 (東大, 醫)
 赤 塚 秀雄 (東大, 醫)
 秋 山 寅雄 (千葉醫大)
 安 藤 國雄 (愛知醫大)
 青 木 甲午郎 (慈恵醫大)
 有 馬 頼 吉 (大阪)
 有 山 登 (新潟醫大, 東大醫)
 朝 川 順 (愛知醫大)
 浅 山 忠愛 (京都醫大)
 吾 妻 俊夫 (東大, 醫)

B

馬 場 武 (陸軍軍醫學校)

C

近 野 政次 (大阪醫大)

D

道 菅 正六 (愛知醫大)

E

遠 藤 浩 (新潟醫大)
 遠 藤 正治 (金澤醫大)
 江 澤 禎一郎 (東大, 醫)

F

福 田 邦三 (東大, 醫)
 福 田 得志 (千葉醫大)
 福 士 政一 (東大, 醫)
 福 島 寛四 (大阪醫大)
 福 富 徳次郎 (大阪醫大)
 古 畑 種基 (金澤醫大)
 古 久 保 富治 (慈恵醫大)

古 庄 乙彦 (熊本)
 古 谷 淳 (新潟醫大)
 布 施 義教 (千葉醫大)
 藤 井 暢三 (東大, 醫)
 藤 懸 廣 (福山衛戍病院)
 藤 瀬 四郎 (鹿兒島高等農林學校)
 藤 田 秋治 (愛知醫大)
 藤 原 豊次郎 (北大醫)

G

後 藤 基幸 (京都醫大)
 五 斗 欽吾 (日本赤十字病院)

H

箱 崎 幸平 (北海道)
 原 隼人 (海軍技術研究所)
 針 谷 武夫 (慶大, 醫)
 長 谷 川 基 (東京)
 八 田 善之進 (宮内省)
 服 部 健三 (東大, 醫)
 服 部 彌二郎 (東京駒込病院)
 林 不二男 (新潟醫大)
 林 榮 (滿洲醫大)
 林 眞 學 (陸軍々醫學校)
 林 亨 (愛知醫大)
 林 敏 郎 (東京濱田病院)

逸 見 文雄 (北大農)
 東 恭 則 (千葉醫大)
 樋 口 元周 (東大, 醫)
 平 井 進 (京大, 醫)
 平 松 壽平 (東大, 醫)
 平 松 鶴吉 (慈恵醫大)
 平 野 英之助 (熊本醫大)

平 山 利弘 (千葉醫大)
 弘 好 文 (東大, 醫)
 廣 畑 龍造 (臺灣)
 廣 神 伊藤 (新潟醫大)
 日 浦 幸助 (神奈川)
 樋 渡 吉治 (鹿兒島)
 堀 義 路 (北大, 工)
 堀 口 修輔 (陸軍軍醫學校)
 堀 野 計一 (千葉醫大)
 堀 内 金次 (千葉醫大)
 堀 内 樂 (東大, 醫)
 保 坂 直人 (傳研)
 星 野 鐵男 (金澤醫大)
 細 田 孟 (佐々木研究所)
 細 川 隆一 (岡山醫大)

I

市 原 硬 (大阪醫大)
 市 橋 敏雄 (傳研)
 井 口 正司 (大阪醫大)
 飯 塚 安喜雄 (東京)
 飯 塚 慶二 (千葉醫大)
 今 井 三郎 (滿鐵醫)
 今 井 通 (京都)
 今 村 荒男 (大阪醫大)
 稻 葉 逸好 (滿洲醫大)
 稻 葉 通明 (京都醫大)
 稻 田 龍吉 (東大, 醫)
 稻 村 昂 (千葉醫大)
 井 上 硬 (京大, 醫)
 井 上 啓太郎 (金澤醫大)
 井 上 浩 (新潟市立有明療養所)
 石 橋 無事 (新潟醫大)
 石 橋 長英 (東京)
 石 橋 松藏 (千葉醫大)
 石 橋 左五郎 (京大, 醫)
 石 田 嘉四郎 (京都醫大)

石 川 一 佐久 (千葉醫大)
 石 川 雄三郎 (慈恵醫大)
 石 本 喜代松 (東大醫)
 石 本 義太郎 (新潟醫大)
 磯 田 仙三郎 (東京)
 伊 藤 正雄 (東京)
 岩 城 惠吾 (新潟)
 岩 谷 信珍 (大阪)
 岩 野 俊治 (滿洲醫大)
 岩 澤 治義 (東大, 醫)
 泉 伍 朗 (金澤醫大)
 泉 仙 助 (金澤醫大)

K

河 合 健吉 (東京)
 河 合 勉 (京大, 醫)
 甲 斐 惣太郎 (慶大醫)
 柿 沼 晃作 (岡山醫大)
 柿 内 三郎 (東大, 醫)
 加 納 芳次 (臺灣)
 唐 澤 利千雄 (岡山醫大)
 笠 森 周護 (東京泉橋慈善病院)
 柏 村 脩 (熊本醫大)
 加 藤 七三 (熊本醫大)
 勝 義 孝 (京大, 醫)
 川 井 銀之助 (京都醫大)
 川 井 左京 (愛知醫大)
 川 北 元三 (新潟醫大)
 河 村 長治 (京都醫大)
 川 村 隆士 (岡山醫大)
 川 島 好兼 (東大, 醫)
 上 代 皓三 (岡山醫大)
 木 川 浩逸 (千葉醫大)
 菊 地 貢 (海軍々醫學校)
 菊 地 武彦 (京大, 醫)
 木 許 寛 (大阪醫大)
 木 村 英雄 (京大, 醫)

木村次郎 (傳研)
 木村直樹 (千葉醫大)
 木村退三 (東京)
 木下廣野 (東大, 理)
 岸 勇 (大阪)
 北川松之助 (九大, 農)
 北野亨 (大阪)
 北里善次郎 (東大, 理)
 小林晃 (東大, 醫)
 兒玉榮一郎 (東大, 醫)
 小金井良一 (海軍軍醫學校)
 小金井三二 (東大, 醫)
 河本禎助 (傳研)
 河野正次 (陸軍軍醫學校)
 小池龜代治 (金澤醫大)
 小池才一 (金澤醫大)
 小泉親彦 (陸軍軍醫學校)
 小泉浩吉 (滿洲醫大)
 小島三郎 (傳研)
 小松通允 (東大, 醫)
 木南正叔 (大阪醫大)
 近藤乾郎 (東京逓信局)
 近藤金助 (京大農)
 古武彌四郎 (大阪醫大)
 小山順治 ()
 久保護躬 (金澤醫大)
 久保德彌 (京都醫大)
 隈川八郎 (慶大, 醫)
 久野修三 (東京)
 栗山重信 (東大, 醫)
 黒田通 (千葉醫大)
 楠本長三郎 (大阪)
 楠三智夫 (大阪市立桃山病院)
 桑島要 (北海道日本赤十字社支部病院)
M
 町田彦三郎 (慈恵醫大)

前田啓 (京大, 醫)
 前田鼎 (京大, 醫)
 丸井壯帆 (愛知醫大)
 正井保良 (大阪醫大)
 益井蒼 (京大, 醫)
 増本文吉 (京大, 理)
 松枝茂 (千葉醫大)
 松本秋介 (京大, 醫)
 松本武一郎 (金澤醫大)
 松村素 (千葉醫大)
 松村桓 (陸軍軍醫學校)
 松岡全二 (大阪醫大)
 松島周藏 (東大, 醫)
 松尾厚 (慶大, 醫)
 真柳英馬 (北大醫)
 水上隆吉 (東京)
 御前慶造 (岡山醫大)
 三澤廣忠 (東大, 醫)
 三角康正 (東京)
 三田定則 (東大, 醫)
 三田村篤志郎 (東大, 醫)
 三羽兼義 (大阪醫大)
 宮川米次 (傳研)
 三宅康次 (北大農)
 三宅捷 (北海道)
 宮本璋 (東大, 醫)
 宮田訂 (大阪醫大)
 水野醇 (陸軍軍醫學校)
 水谷通治 (愛知醫大)
 森健吉 (京大, 醫)
 守中清 (滿洲醫大)
 森田澄一 (東大, 醫)
 森澤清 (京大, 醫)
 宗久佐 (慈恵醫大)
 村山達三 (東京駒込病院)
 室橋民衛 (東京木澤病院)

武藤喜一郎 (陸軍獸醫學校)
N
 長岡博 (慈恵醫大)
 長崎光國 (千葉醫大)
 永井一夫 (北大, 醫)
 永山武美 (慈恵醫大)
 内藤豊助 (千葉醫大)
 内藤靖 (東大, 醫)
 中本覺二 (陸軍科學研究所)
 中村文次 (慶大, 醫)
 中村勝星 (慶大, 醫)
 中村桂 (大阪醫大)
 中村喜太郎 (陸軍軍醫學校)
 中村政司 (熊本醫大)
 中村環 (千葉醫大)
 中村幸彦 (北海道)
 中西朴 (大阪醫大)
 中島駒次郎 (東京)
 中島了介 (千葉醫大)
 中尾幸夫 (京都醫大)
 西岸真玄 (滿洲醫大)
 新田一衛 (京大, 醫)
 丹羽七次郎 (新潟醫大)
 野坂三枝 (東大, 醫)
 野崎清治 (滿洲醫大)
 野津龍三郎 (京大, 理)
O
 小畑惟清 (東京濱田病院)
 落合貞俊 (千葉醫大)
 小田定文 (臺灣)
 小田壽雄 (千葉醫大)
 小田康貞 (東大, 醫)
 織田敬信 (京大, 醫)
 尾形燦 (北大, 醫)
 小川巖 (愛知醫大)
 小川瑛五郎 (京都醫大)

小原芳樹 (東京)
 大黒薫 (北大, 醫)
 住西彰 (慈恵醫大)
 大野章三 (滿洲醫大)
 大里俊吾 (金澤醫大)
 大島金太郎 (臺灣)
 大島幸吉 (北大附屬水産専門部)
 太田治久 (陸軍軍醫學校)
 太田吉彌 (東大, 醫)
 大瀧忠利 (陸軍軍醫學校)
 大谷誠 (千葉醫大)
 大槻菊男 (東大, 醫)
 大槻虎男 (東大, 理)
 大山西一 (東大, 醫)
 大山綱憲 (慶大, 醫)
 及川周 (新潟醫大)
 岡田清三郎 (千葉醫大)
 岡崎克己 (東北大, 理)
 沖中忠一 (京大, 理)
 奥田讓 (九大, 農)
 奥村晋三郎 (臺灣)
 鬼澤仁衛 (東大, 醫)
 小野勇二 (新潟醫大)
 小山憲佐 (第九師團司令部)
 小澤修造 (大阪醫大)
S
 佐伯靜男 (金澤醫大)
 坂口康藏 (東大, 醫)
 坂口昌洋 (東大, 醫)
 榊原五百枝 (熊本醫大)
 坂村徹 (北大, 理)
 櫻井虎雄 (新潟醫大)
 三條英一 (新潟醫大)
 佐野金吾 (愛知醫大)
 佐々木英一 (熊本)
 佐々木隆興 (東京)

- 佐々木哲丸 (東大, 醫)
- 佐々木 渡 (北海道)
- 佐藤 彰 (東北大, 醫)
- 佐藤 剛藏 (京城醫大)
- 佐藤 要 (東大醫)
- 佐藤 正男 (新潟醫大)
- 佐藤 正一 (臺灣)
- 佐藤 忠雄 (東大, 理)
- 澤田 敬義 (新潟醫大)
- 關根 道夫 (大阪醫大)
- 瀬 水 洋 (東大醫)
- 柴田 桂太 (東大, 理)
- 柴田 經一郎 (新潟醫大)
- 紫藤 貞一郎 (北大, 醫)
- 志賀 庸三 (慶大, 醫)
- 志多半三郎 (京都醫大)
- 志方 益三 (京大, 農)
- 島 信 (東京)
- 島村 虎猪 (東大, 農)
- 清水 多榮 (岡山醫大)
- 下田 徳三郎 (慈恵醫大)
- 下 村 明 (京大, 理)
- 鹽田 廣重 (東大醫)
- 鹽野 正家 (東大, 醫)
- 鹽谷 不二雄 (東大, 醫)
- 鹽路 英吉 (和歌山)
- 正田 政人 (岡山醫大)
- 正路 倫之助 (京大, 醫)
- 庄 司 義治 (岡山醫大)
- 左右田 徳郎 (東大, 理)
- 園田 繁艸 (静岡)
- 須藤 憲三 (金澤醫大)
- 末吉 雄治 (慶大, 醫)
- 末吉 治郎平 (北大, 醫)
- 諏訪 登一 (大阪)
- 鈴木 重雄 (鹿兒島高等農林)
- 鈴木 甚吉 (慶大, 醫)

T

- 立花 次郎 (千葉醫大)
- 田所 哲太郎 (北大, 農)
- 多賀谷 巽 (慈恵醫大)
- 高橋 榮治 (北大)
- 高橋 正人 (慶大, 醫)
- 高橋 信美 (千葉醫大)
- 高橋 静 (大阪醫大)
- 高畑 哲五郎 (九大, 醫)
- 高松 泰三 (北海道)
- 高田 蒔 (東京)
- 高田 守道 (東大, 醫)
- 高田 泰雄 (熊本醫大)
- 竹田 正次 (縣立神戸病院)
- 武田 義道 (大阪醫大)
- 武田 芳男 (慈恵醫大)
- 竹本 秀夫 (傳研)
- 詫摩 武人 (東大醫)
- 田 宮 博 (東大, 理)
- 田村 憲造 (東大, 醫)
- 田中 長次 (京大, 理)
- 田中 静男 (金澤醫大)
- 谷 友次 (金澤醫大)
- 谷村 稔 (兵庫)
- 谷野 富有夫 (金澤醫大)
- 淡野 豊太郎 (京大, 理)
- 辰井 正常 (大阪醫大)
- 寺岡 森太郎 (岡山醫大)
- 照内 豊 (慶大, 醫)
- 富永 忠司 (新潟醫大)
- 戸谷 銀三郎 (南滿鐵大連醫院)
- 豊田 作太郎 (東大, 醫)
- 常吉 剛太 (東大, 醫)
- 角田 育之 (北海道)

U

- 内 田 守 (熊本九州療養所)
- 内野 仙治 (京大, 醫)

- 内野 豊生 (東大, 醫)
- 上原 幾久治 (朝鮮木浦府立病院)
- 宇賀田 爲吉 (東大, 醫)
- 梅澤 純一 (北海道札幌鐵道病院)
- 牛圓 新太郎 (金澤醫大)
- 碓居 龍太 (東大, 醫)

W

- 和田 長作 (慶大, 醫)
- 和田 平武 (千葉醫大)
- 和田 咲三郎 (京大, 醫)
- 和田 由常 (滿鐵大連醫院)
- 渡邊 篤 (東大, 理)
- 渡邊 治 (臺灣)

Y

- 矢吹 舜 (東大醫)
- 山田 鼎 (東京)
- 山田 康 (東京濱田病院)

- 山田 邦彦 (金澤醫大)
- 山本文陸郎 (東大, 農)
- 山本 亮 (理研)
- 山本 康裕 (東大醫)
- 山本 善隆 (慶大, 醫)
- 山中 覺 (臺灣)
- 山取 瀧三 (北大, 醫)
- 山崎 義男 (滿洲醫大)
- 安田 守雄 (東大, 醫)
- 安井 慧之助 (臺灣)
- 横田 壽照 (慈恵醫大)
- 横田 次郎 (慶大, 醫)
- 横山 武夫 (京都醫大)
- 米倉 昌達 (京都藥學專門學校)
- 米村 貞知 (岡山醫大)
- 吉本 清太郎 (東京, 日本赤十字)
- 吉村 清尙 (鹿兒島高等農林學校)

研究室通信

東京帝國大學醫學部生化學教室

震災の爲に凡てを奪はれた當教室は僅か十餘名の研究生に擁されて焼残りの教室から教室へこ轉々居を移し浮浪民の悲しみを不安を忍ぶこ半歳にして柿内教授の歸朝を迎へるや教授滞歐中に蒐集せられた圖書、器械は陸續として到着し古きは新しきによつて補充せられ復興は一舉にして成つた。今や三十名の熱心なる研究員は更新の意氣概に「かくの如き狹隘不便なる假教室に於ても仕事の出来るこを天下に知らさねばならぬ」といふ教授の御言葉通りの努力が續けられて居る。

尙當教室研究員が業績の發表機關として雑誌に Journal of Biochemistry を、會合に日本生化學會關東部會を手近に有するこは眞に幸ひを云はなければならぬ。

その他温知會に於て各科専門の知名の士の講演により知識の範圍を擴め、俱進會に於て學生と共に人格の向上に志す等他に見られない幸福を享けて居る。

職員及び研究員氏名

- 教授、柿内三郎
- 助教授、河本禎助、兒玉桂三(外遊中)、藤井暢三
- 助手、宇賀田爲吉、宮本璋
- 有給助手、松島周藏
- 研究員、坂口昌洋、豊田作太郎、有山登、樋口元周、谷康貞、小松通允、常吉剛太、赤塚秀雄、内藤靖、鹽野正家、糸井素雄、安田守雄、石本喜代松、内野豊生、赤尾晃、高田守道、江澤禎一郎、鈴木幹、鬼澤仁衛、堀口修輔

研究題目

- 未所屬養素の研究
- 血液凝固に關する研究

原蟲の生化學的研究
 脂肪酵素の研究
 酸化作用の研究
 Insulin の研究
 核酸の分解に關する研究
 Kreatinin の研究
 Haematoporphyrin 獸の研究
 自家分解に關する研究
 細菌の化學的研究
 蛋白酵素に關する研究
 表面張力に關する研究 以上

千葉醫科大學醫化學教室

昇格後二年、赤松教授歸朝一年にして諸般の設備も漸を追つて整ひ今や新興の氣溢れて居る。

職員氏名、

教授、赤松茂。
 助手、稻村昂、中島了介。
 副手、小林英雄、堀田金次、小田壽雄。
 囑託、山崎徳藏。

熊本醫科大學醫化學教室

私は前醫專教授神森氏のあゝに昨年五月参りました其後一年間教室の設備や増築やりに骨を折り、一方には早速本大學第一回生の講義や實習やりに忙しい思をし昨今内容外観稍整頓した中にやつと一息してゐるところでございます。たゞ今教室には

助手、柏村修、榊原五百枝

研究生、佐々木英一、高田泰雄、平野英之助、内田守。

の六君がらつしやいます。

柏村君は血液凝固と Lipoid との關係を尋ねる前提として Fibrinogen に關して調べてらつしやいます。榊原君と佐々木君とは實驗的壞血病の新陳代謝を御研究中で佐々木君は目下 Calcium の方面を榊原君は Lipoid の方面をやつてらつしやいます。高田君と平野

君は卵黃の Lipoid の生物化學的研究を、内田君は Lepa 患者の血液の Cholesterin に關して御研究中です。

私の教室はまだ出来上つた許りで設備の點に非常に不十分な點が多い事は本大學中第一でございまして、萬事に不便であることは大變残念に思つて居ります。今後皆様の御庇護で早く人並にまで成長させ度いご毎日祈つて居ります。(加藤氏通信)

京都帝國大學理學部生物化學教室

當生物化學研究室は大正十一年四月十四日上棟式あり。同九月末建築を全うし設備を終り十月初實驗を開始せり。

建物は煉瓦二階造、建坪百二十五坪。

階下には研究室(二)、蒸溜室(二)、分析室(二)、オゾン室、天秤室、講義室等あり。階上には研究室(四)、圖書室、硫化水素室、暗室、大實驗室等あり。地下には遠心器室、小使室、倉庫あり。屋根裏を試料乾燥用及び試料保存用に供せり。

當研究室の研究者氏名、

教授、小松茂。

助教授、野津龍三郎

講師、増本文吉。

助手、倉田正郎。

副手、沖中忠一。

大學院學生、田中長次、服部義之助、篠田統

學生、小澤信作。

研究題目、

1) 柿實の成熟に關する研究

成熟に關する報告

第五報、外字生化學雜誌記載

第六、第七報、京都帝國大學理學部紀要A記載

柿澁に關する報告

三報、京大理學部紀要記載

糖類分離に關する報告。

一報、京大理學部紀要記載

2) 日本産植物の化學

七報、京大理學部紀要記載

3) 多糖類構造論。

三報、京大理學部紀要記載

4) 蛋白質研究

一報、外字生化學雜誌記載

5) 動物の榮養並に生長に關する生物化學的研究

6) タールの生物化學的研究

一報、皮膚科紀要記載

7) 過熱蒸氣の有機物に對する作用

8) 海藻の生物化學的研究

等は目下當教室に於て研究中の題目なり。

(小松氏通信)

金澤醫科大學醫化學教室

當教室は明治四十五年の建築に係り、木造二階建、延坪二百二十坪、外に平家四十五坪の講義室、九十六坪の學生實習室に九坪の動物試驗室を有す。就中第二研究室は横濱の富豪故渡邊和太郎氏の寄附金によりて設備されたるものなり。當教室は目下殆んど專門學校時代其儘なるが故に漸を逐て内部に模様替を施し動物室、危險藥品庫等増築の豫定なり。

本學は建築物に於て將又其設備に於て缺くるところ頗る多きにも拘らず昨秋當地方に於て舉行せられたる陸軍特別大演習の祝忝くも 皇太子殿下の行啓を賜はり實際當教室にも玉歩を進めさせ給ひ、いご御熱心に學生實習室に研究の模様等を御覽あらせられたり。是れ偏に殿下の自然科學を愛せらるゝ難有き御心に基くものご拜察し奉り斯界の爲め慶賀に堪えざるごころなり。

當教室の職員、研究員は總數十三名なり。中數名は目下練習中に屬し、數名は鶏脚氣、腎疾患、膽石等に關する研究に従事しつゝあり。

職員、研究員の氏名左の如し。

教授、須藤憲三。

助教授、松本武一郎

助手、田中靜雄、遠藤正治。

技手、廣瀬文雄。

客員、小山憲佐(第九師團軍醫部長)

和田龜俊(病理學助教授)

加藤壽一(第二外科副手)

専攻生、井上啓太郎、千葉勝、岡本正教。

小田島權五郎、本谷謙二。(須藤氏通信)

岡山醫科大學醫化學教室

當教室は大正十二年春清水教授の歸朝赴任を以て更新の機を劃し、爾來内容設備着々として面目を改め、其の完成に向つて著しき進展を見せてをります。目下當教室に在つて斯學の究明に従ふ者十餘名、大自然の領域に向つて一斧一鉞、早晨深更、型の如く浮身をやつしてをります。其の題目も多般に互り、刻々の勞を積んで居り、就中膽汁内諸成分に關する化學的、生理學的の方面の研究につきましては一段の力を注ぎ、何分の收穫を豫期して居りますが、未だ大方のお目に止る様な業績も擧つて居りません。尙毎週雜誌抄讀會を催し教授以下教室員輪番を以て此に當り、斯道の進歩に遅れざらんごころを期して居ります。此會合も好晴の際なきには一同山嶺水邊に身を運び、澄明の氣、麗朗の陽の裡に一喫一讀、一攝一知、以て「樂而悟」の哲道を行ふて居ります。此他時々教室よりの遠足を行ひ各季各様の風物に浴し、頃日の水火同行の苦慮を慰むるご共に、天の時地の幸を利して人の和を圖らうご願ふて居ります。

職員及び研究員氏名、

教授、清水多榮。

助教授、戸田茂(洋行中)

米村真知、御前慶造、上代培三、唐澤利千雄、寺岡

森太郎、正田政人、細川隆一、生馬茂、岡村竹次、

藤原政雄、川村隆士、大森操。(唐澤氏通信)

愛知醫科大學醫化學教室

研究室の模様。

當教室は醫學專門學校時代に於ては研究室も狹隘を

極め、こゝに研究するものも数少く、発表業績も亦寥寥たるものなりしが大正十一年十二月 Michaelis 博士を迎へてより解剖学教室の一部を割きて當教室に附屬せしめ、物理化学に必要な特種の藥品、器具の補充を行ひ、教室の面目急に一新するや茲に馳せ参じて研究に従事する者簇出し目下十數名の研究者を持てるは田舎の基礎醫學教室としては珍なり可し。研究者諸氏のなしつゝある作業は總て先生の得意とする物理化学的のものならざるはなし。こゝに遊ぶもの一方には獨逸語會話の練習をなし他方には物理化学の研索をなし一舉兩得の姿なり。されど一方に利あれば他に害あるは世の常の習ひ、思ふ事云へぬ腹工合の悪さは兼好法師ならでも推し測らるべし。

職員氏名。

講師、Léonor Michaelis
助手、小川巖、水谷通治、丸井壯執。

研究員氏名。

林三勝、道菅正六、河合左京、藤田秋治、安藤國雄、佐野金吾、杉本終三。
Michaelis 講師就任後同講師の指導を受け研究員たり人々に下の六氏あり。
中島高一、加來天民、前田正文、水上隆吉、服部彌治郎、松野源吾。
また當教室に於て生化学講習會を開くこゝ二回、此に馳せ集りたる諸氏は下の十二名なり可し。
中野隆、中島高一、松本武一郎、鹽見武藏、前田正文、佐藤總吉、加來天民、福田邦三、安藤國雄、安原豊也、古宇田徹太郎。(朝川氏通信)

東京慈惠大學醫學部化學教室

當教室は大震災の際灰燼に歸したので當時の助手及研究生の一部が慶應大學醫學部化學教室の御好意によりて同教室で研究を續けさせて戴いたことは私共の深く感謝いたして居る次第です。幸に當慈大復興後は再び歸りて従前通り研究に従つて居ります。試験管一本から揃へ初めたのであるが、現在では先づ實驗に支障なき

迄になつたことを喜びます。實際當時の困難に想到すれば少し位の不自由は何でもないこゝを考へます。毎月一回午後四時から生理學及藥理學教室と合同の抄讀會を開いて居りますが相互に利益がある様です。

職員及び研究員氏名。

教授、永山武美。
講師、横田壽照。
助手、古久保富治。
副手、多賀谷巽、町田彦三郎、武田芳雄。
研究生、青木甲午郎、宗久佐、長岡博、河合健吉、西田芳雄、徳西彰、平松鶴吉、鎌田清太郎、下田徳三郎。(永山氏通信)

佐々木研究所

當研究所にて仕事をして居る者は

佐々木隆興、大塚一郎、上田眞之助、橋本徳二、藤澤新七。

であります。

Diketopyperazin を起點としての種々の研究、Diamino acetone よりの合成的研究、Aminosäure の微生物的分解の研究等が目下の主なる研究経路であります。生理學的及び病理生理學的研究は震災後目下中止して居ります。何れ復活する筈です。小生の主宰して居る研究所には未だ確定的の名稱がありませんが、文部省學術會議よりの宛名として佐々木研究所としてありましたから不敢取其名を用ひて置きます。(佐々木氏通信)

北海道帝國大學醫學部醫學部化學教室

當教室の近狀に就いては別段申し上げる程の事もございません。只、先般 Michaelis 教授來札、約一週間の講演を願ひ各教室共大いに得る所ありその講演内容を小生發刊の「生化学の研究」に不日紀念號として發表の心算でございます。教室としては膠質化学の攻究に志して居ります。やゝまごまるに至りましたから Journal of Biochemistry に發表させて戴き度く存じます。私共はまだまだ學生ですから只努力を要する事と思ひ

つゝ毎日五時から抄讀會を開いて居ります。幸なこゝにて時々工學部の方なごの御臨席を得て喜んで居ります。

教室には下記の職員、研究生の他に特に興味を持つて居る學生十數名が出入して居ります。

教授、大黒薫。
助教授、末吉治郎平。
助手、山取瀧三。
研究生、箱崎孝平、眞柳英馬、高松泰三、緒形榮。(大黒氏通信)

九州帝國大學農學部農藝化學教室

農藝化學教室講座及びその擔任教授は次の如くである。

農藝化學第一講座(肥料學、土壤學)、大工原銀太郎
農藝化學第二講座(家畜營養學、酪農學)、片山外美雄
農藝化學第三講座(食品化學)、滿田隆一
農産製造學講座、湯川又夫
生物化學講座、奥田讓。

尚生物化學教室研究者及び研究題目は下の如くである。

含硫黃「アミノ」酸に就て、奥田讓(教授)
酵素作用に就て、北川松之助(助教授)
(奥田氏通信)

營養研究所

營養研究所分課規定並に研究部部員下の如くである。

基礎研究部 研究事項 部員
1. 化学分析に關する事項 杉本好一
1. 新陳代謝試験に關する事項 樋口太郎
1. 生理及病理に關する事項 高比良英雄、加藤正吉
1. 細菌に關する事項 近藤光之
1. 物理に關する事項 下田吉人、保多義正、井上憲政、石橋英一、掛川俊二、松澤九二雄、茂原春恵、菅谷真砂、花田さつき。

應用研究部 研究事項 部員

1. 食糧に關する事項 原 徹一
甲、天然食品(水産品、救荒品を含む) 高田亮平
乙、加工食品 藤卷良知
丙、試培 中村不二、原田 治
1. 經濟營養に關する事項 松室秀夫
1. 貯藏配給に關する事項 高鍋千代
1. 調理及食器に關する事項 小野茂吉
1. 小兒營養に關する事項 加藤敏雄 西堀一夫
1. 廢物利用に關する事項

調査部

1. 調査、統計、史料に關する事項
1. 講習、展覽、宣傳に關する事項

庶務部

1. 人事及文書其の他各部に屬せざる事項
1. 調度、會計に關する事項

東京帝國大學理學部生物化學教室

新設の同教室の發展は左右田助教授の歸朝を迎へてより斯學界に期待と興味を以て注目されつゝある。現今實驗中の研究としては
蛋白質の Kolloid 状態に及ぼす、表面作用を持つ非電解質の影響に就て 菅原 健
がある。

九州帝國大學醫學部醫學部化學教室

職員及び研究者氏名

教授、後藤元之助
助教授、高畑哲五郎
助手、正宗一、占部虎雄、石文煥
大學院學生、中村善雄、田中巖、太田作治郎
専攻生、兒島俊亮、久米實一

理化學研究所

鈴木(梅)研究室研究項目、
營養に關する研究 鈴木梅太郎

新清酒の製造	鈴木梅太郎
	加藤 正二
	坂田 靖人
醸酵生産物に就て	東 恒人
Vitamin A 並に脂肪、炭水化物の 栄養に関する研究	中宮 次郎
	川上 行蔵
	北里 寅男
Vitamin B の研究	佐橋 佳一
Vitamin C の研究	三浦政太郎
	辻村みちよ
製茶中の Vitamin C に就て	岡部 長世
Vitamin A の研究	松岡 登
Amino 酸の利用法	六所 文三
Amino 酸の分離法	野口 太郎
Amino 酸の研究	徳太總太郎
Amino 酸及醋酸, Aceton の製造	渡邊 俊雄
	坂田 貞臣
	加藤 清
澱粉糖の製法	上島 義雄
殺蟲剤の研究	山本 亮
	鷺見 瑞穂
南洋産デリスの成分	武居 三吉
食酢の製法	植村 泰二

東北帝國大學醫學部醫化學教室

職員及研究員氏名
 教授、井上嘉郎治
 講師、林喬
 助手、竹村清雄、升水好文、佐々木武雄、
 副手、岡原芳男、中西林蔵、松本松男、谷澤貞次郎
 及川正助、山田吉之助、小泉浩吉、
 大学院學生、古橋豊

大阪醫科大學醫化學教室

職員及び研究員氏名、

教授、古武彌四郎、平井保良
 助教授、松岡全二
 試講、福富徳太郎、近野政次、
 助手、北野亨、山本襄保、佐藤牧夫、
 副手、武田義道、吉岡部、宮田訂、關根道夫、市原
 硬、中西朴、木南正叔、辰井正常、木許寛、
 野々上好太郎、野島泰治、井口正司、
 研究科學生、谷保平、後藤眞語、竹村齋治、丸山眞
 正、岩倉信珍、宮井茂吉、三羽兼義、村橋健蔵、
 菊池倫平、長屋卓爾、小林浩吉、肥爪貫三郎、
 専修生、高橋靜、中村桂、坂田春雄、

研究項目

- 1) Tryptophan より血色素形成
- 2) Tryptophan の一新中間新陳代謝産物の構造
- 3) Toluyldiamin 中毒に際して尿中出现する Pen-
tose 様物質
- 4) Eudium lactis に因る二三物質の分解
- 5) 諸種 Amino 酸及その中間新陳代謝産物の生理的
意義

南滿醫學堂醫化學教室

職員氏名、
 教授、岩野俊治、
 講師、野崎清治、
 助手、小泉浩吉、竹神康雅、

長崎醫科大學醫化學教室

同教室は創立後日尚淺くかつ給水難に悩んで居るが
 熱烈なる意氣不撓の努力を以て真理の探求に猛進
 して居る。

職員及び研究者氏名、

教授、富田雅次
 助教授、藤原秀勝
 助手、古森恕、千住雄造
 研究者、深川友吉、龜井照見、辛島詢士、

(宮田氏通信)

鹿児島高等農林學校化學教室

研究題目並に研究者氏名、

- 1) 有機鹽基類の生理的作用に就て、
- 2) 海産物の肉エキス成分に就て、
- 3) 筍の成分特に硫黄化合物に就て、
- 4) 米糠エキスの研究、

以上研究者、吉村清尚、藤瀬四郎、

- 1) 脂肪の消化作用に及ぼす影響、
 - 2) 動物饑餓の際に於ける Alkali 鹽類の影響、
- 以上研究者、鈴木重雄、牟漏田哲勇、

- 1) 蘇鐵果實の蛋白質に就て
 - 2) 蠶兒の品種と水素 Ion の關係、
- 以上研究者、辻本孫三郎

- 1) Cyan 化合物の植物に對する作用に就て、
- 以上研究者、村田久次、

- 1) 日本人毛髮の硫黄含有量に就て
 - 2) 皮下に注射せられたる Amino 酸の生體に及ぼす
影響に就て、
- 以上研究者、樋渡吉次 (吉村氏通信)

慶應醫科大學醫化學教室

職員氏名、
 教授、照内豊
 助教授、末吉雄治、隈川八郎、
 助手、中村勝星、鈴木甚吉、大山綱憲、中村文治、
 横田治郎、甲斐惣太郎、石澤豊松、國本浩太郎
 都築益世、山本善隆、松尾厚、和田長作、高橋
 正人、稻葉藤吾、荒川潤次郎、針谷武夫、志賀
 庸三、

北海道帝國大學農學部農藝化學教室

目下同教室内各研究室に於ける研究者の研究題目と
 の主なるもの下の如くである、
 1) 生物化學研究室、
 研究題目、米の生化學的研究

研究者、田所哲太郎、中村幸彦、若狹清治、長尾半
 右衛門、渡邊修吾、
 2) 應用、細菌學研究室、
 研究題目、亞麻浸水に關する有效細菌の分離並に蒸
 氣浸水法の研究、
 研究者、秋野豊太、
 研究題目、菌類の生理學的研究、
 研究者、山本義彦、
 3) 農産製造研究室、
 研究題目、1) 醸造上至要なる酵素の理化學的性
 質に關する研究、2) 醸造原料並に醸造物代用品
 の研究、3) 酒精醸酵に關する研究、
 研究者、逸見文雄、伊藤光治、月足憲正、穴戸英雄
 4) 食品化學、家畜飼養學研究室
 研究者、高橋榮治、白濱潔
 高橋教授歸朝早々にして目下研究準備中、
 5) 土壤學、肥料學研究室、
 研究題目、土壤 Aluminium に關する研究、
 研究者、三宅康次、外一名
 研究題目、作物耐病性の化學的研究
 研究者、三宅康次、立足仁 (三宅氏通信)

新潟醫科大學醫化學教室

近來川北教授小恙を得、爲めに研究上一頓挫を來し
 て居たが、若き人々の銳氣抑へ難く茲に教室の充實に
 力を致し今や第二次飛躍の氣運に際會して居る、
 職員及び研究員氏名、
 教授、川北元三、
 助教授、有山登、
 助手、櫻井虎雄、古谷淳
 副手、石本義太郎、遠藤浩
 研究員、石橋無事
 囑託、後藤

日本生化学會會則

名稱、目的、會員

- 一、本會を日本生化学會と稱す。
- 二、我邦に於ける生化学の發達を圖るを以て本會の目的とす。
- 三、生化学の研究に従事し又は斯學に興味を有するものを以て會員とす。
- 四、會員は各所在地に於て可及的の地方部會を構成するを要す。
- 五、本會の目的を達成せんが爲め集會を催し又會報を發行す、又會員中より一定數の委員を選定す。

集會

- 六、集會を分ちて例會及び總會の二とす。
- 七、例會は各地に於ける地方部會に於て毎月若くは一年數回之を行ふ。
- 八、總會は毎年一回各大學所在地に於て順次之を開催す。總會演説を分ちて交見演説及び報告演説の二とす。交見演説に於ては各地方部會(地方部會なき時は該地大學に於ける斯學専門教授)より一個宛推薦したる論文を以て演題とす。但該論文は既に地方部會にて發表したるものにては差支なし。報告演説に於ては各約十五分を超

大正十四年四月

えざる時間を以て會員業績の報告を行ふ。

會報

- 九、會報は當分の間隔月一回之を發行す。
- 十、會報には各地方部會例會の記事(演説の要旨及び討論を含む)會員の動靜、内外生化学界に於ける重要なる記事、會員の寄稿(原著論文に非ざる鳥瞰圖の如きもの)等を掲載す。
- 十一、毎年一回會報特別號を發行し之に總會に於ける記事を掲載す。

委員

- 十二、委員を分ちて常務委員及び總會委員とす。
- 十三、常務委員は各地方に於ける會員中より若干名之を選定し地方部會及び會報の所務を司る。
- 十四、總會委員は總會開催地の常務委員及び尙必要に應じ若干名の新なる委員を擧げて臨時之を構成し總會に於ける諸務を司る。
- 十五、委員の任期を一ケ年とす。但し重選を妨げず。

會費

- 十六、本會の會費を年額七圓とす。但し各地方部會に於ては適當なる地方部會費を蒐集するを得。

日本生化学會

假事務所 東京帝國大學醫學部
醫化学教室内

大正十四年十月十七日印刷
大正十四年十月二十日發行
編輯兼發行人 有山登
東京市本郷區本富士町東京帝國大學醫學部醫化学教室内
發行所 日本生化学會
東京市本郷區本富士町東京帝國大學醫學部醫化学教室内
印刷者 柴山則常
東京市本郷區駒込林町一七二
印刷所 會社杏林舎
東京市本郷區駒込林町一七二